

包帯と傷薬 サンプル

※※※超超超閲覧注意です。

失禁・陰茎タバコ炙り・尿道口灰皿（火傷したくなければ扱いてカウパーで濡らしておけ）

陰茎針刺し（皮は板に打ち込み）・陰茎陰囊鞭打ち・腸内洗浄等（順不同）

「す、すみませんっ」

「すみませんすみませんでなあ、謝るばかりで全く返さねえじゃねか！」

「すみませんっ」

男女が額を床に擦りつけて謝罪を繰り返す。

「すみません、じゃなくて一体いつ返してくれんのかを聞いてんの。借りたら返す、そんなの子供でも分かるよな」

「明後日！ 明後日にはお返しできますから！」

「ほう。明後日、な。きつちり耳揃えて返してもらおうぞ」

「はいっ！」

明後日――。

「早川さあん！」

スーツ姿の男が玄関を叩く。古い木造のアパートだ。二階に上がる鉄の階段は錆つき、ところどころ空が見えている。

「早川さあん！ 約束の日ですよ！」

コンコンというノックからドンドンと力強い音に変えても早川夫妻は顔を出さなかった。ノックをしていた男たち三人に緊張が走る。

一人が玄関ドアの隙間に顔を近付け臭いを嗅いだ。

「……開けるぞ」

男――伊藤がドアノブに手を掛けた。カチャ、と抵抗もなくノブは回った。

「早川さーん、入るよ」

中に隠れていて、一步踏み入れた途端に不法侵入だと騒がれるようなことは面倒くさい。今は些細なことですぐに引っ張られるからやりにくい、と伊藤は思った。

「早川さーん、いないの？」

玄関ドアを開けると短い廊下があり、すぐに部屋が広がっている。玄関に片足を踏み入れるだけで部屋の全貌が見渡せた。

夫婦と高校生の息子が一人。三人で住むには手狭過ぎるワンルームだ。同情したことはなかったが、このときばかりは狭い部屋で良かったと思う。他の部屋の探索は極力したくない。死体を見るのはヤクザだって嫌なのだ。

「いねえな」

逃げられた、と一瞬で悟る。しかし荷物は残っていた。ちよつと買物に出ている、という風だ。しかしゴミ捨て場で拾ってきたような古いちゃぶ台には一枚の紙が置かれていた。

『ごめんなさい』

恐らく母親の字だろう。裏はスーパーの特売だ。手掛かりになるようなものもない。

「探せ」

下の者にはそう指示するが、何かおかしい、と感じていた。

夫妻はギャンブルで借金を抱えた。しかし息子だけは常識があるタイプだった。

せめてと言つてアルバイトで稼いだ金を親に内緒で渡してきたことがあったのだ。借りたら返すのが当たり前だから、と。あんな親で恥ずかしいと全てに絶望した目で言っていた。伊藤が親と縁を切る方法を教えてやるかと思つたほどだ。

ヤクザも人間だ。屑だと思ふ債務者もいれば、庇つてやりたくなる債務者もいた。けれど取り立てる。それが仕事だからだ。貸したものは返してもらふ。借りた先がヤクザだったからと言つて返しませず警察に泣きつくのはヤクザ以上にあくどい。人としてどうなんだと言つてやりたくなる。

しかしこちらだつて仕事なのだ。本人が返せそうになればその親類に声を掛けることがないわけではない。しかし実際には親類に返済義務はない。だから、もしその親類が体裁の悪さを気にするタイプなら借金があることを耳打ちしてやるのだ。そうするとあちらから金を払ってくれる。もちろんこちらは「代わりに返せ」なんて一言も言つてはいない。

「何ありません」

「……なくなっているものはないか」

「印鑑や通帳もあります。中身は空っぽですけど」

「最後に下した日には」

「一週間前ですね」

一週間前からこの夜逃げを計画していたのか。それとも普通に生活費として下ろしたのか。

「……息子の物はどうだ」

「全部揃つてます。……これ、本当に逃げてるんですかね」

アルバムから何から全てあつた。本当に着の身着のまま逃げたようだ。もしかしたらこれが目的だったのかもしれない。ちよつと出かけている風を装つて、逃げる時間を稼ごうとしているのかもしれない。外に出て携帯を抜く。短縮を押して若頭に電話を掛けた。

『俺だ』

「お疲れ様です。今早川のところにおるんですが、いなくなりました」

『逃げられたのか』

伊藤は詳細を話した。人間以外そのまま全て残っていることと、ごめんなさいの手紙。

若頭は一分程の沈黙の後で口を開いた。

『今夜、張つていろ』

「……それは」

『息子だ。帰ってくるかもしれん。帰ってきたら絶望させて連れてこい』

「わかりました」

息子が帰ってくる——でも一体どこから。

そのまま三人で部屋を出て車に戻った。アパートの玄関が見える位置に車を移動させ待機する。

「若頭、どうして張れなんて言うんでしょうね」

「息子が帰ってくるかもしれないと言っていた」

「え、でも逃げたんでしょう」

「……出掛けているだけかもしれない」

息子はまだ高校三年だと言っていたが、そうは見えない程幼さの残る可愛いらしい顔立ちをしていた。そんなに大きいとは思えず、金を渡してきたときには中学生がお年玉を持ってきたと思ったものだ。

数か月経った今でもはつきりと思い出せる。可愛いのに、表情のない息子の顔。覇気のない声——。

「あの、これ、ごめんなさい」

「何だ」

「お金。父さんと母さんが借りてるから。ごめんなさい」

「……この金はどうしたんだ」

「バイトした」

「バイトできる年じゃねえだろ」

違法なことを咎められる立場じゃない。けれどその幼さから可哀想だと思ってしまったのだ。あんな屑の子供に生まれてしまったせいでこんな表情をしているのかと不憫に思えた。

「お前いくつだ」

「高三」

「……見えねえな」

息子は何も言わず、裸のままの一万円札を二枚こちらに差し出していた。

「それ、本当は自分の食費とか学費なんじゃねえのか」

「……そうだけど、自分のことに使うより返すのが先だから」

反面教師として育ったのか、と思った。同時に守ってやりたいとも。

「……俺が言うのもなんだが、高校は出ておいた方がいいぞ」

「本当は高校なんて行ってる場合じゃないから。それに奨学金だから借金は増える一方だし」

息子の目は死んでいた。きつと未来に幸せなんて一つも浮かんではないのだろう。それはそうだ。ヤクザが取り立てに來ている家でまともな生活を送れるわけがない。それにこの年だ。親の屑さは息子が一番分かっているだろう。それでも息子本人がまともに育ったのがせめてもの救いか。

「……その二万は俺が補填しといてやる。しっかり食って大きくなれ。だが親父らにその金見つかなよ」

息子は少しだけ表情を変えた。驚いたような、泣きそうな顔をした。その頭をくしやりと撫で、車に戻った。それから取り立てに行く度息子の姿を探したが、学校なのかバイトなのかほとんど見かけるとはなかった。

「……もしかしたらあの屑は息子を置いて行ったのかもしれないな」

ポケットから特売チラシを出す。このごめんなさいはもしかしたら息子宛だったのかもしれない。

短針が二十二時を回ったときだった。

「息子です！」

部下の声に顔を上げると、息子がとぼとぼと歩いていた。

「まさか……本当に帰ってくるとは」

念のため家に入るところまで見届けてから車を出た。そして玄関をノックする。

「はい」

息子はすんなりと出た。久しぶりに見た息子の顔。やはり表情はなかった。

「親父さんとお袋さんはどうした」

「……いない、みたいです」

「いつもいねえのか」

「十一時半くらいに帰ってくる人が多いです」

十一時半。つまり二十三時半だろう。パチンコ屋の閉店時間は二十三時。そこから徒歩で帰宅すればそれくらいの時間になる。

「……ちよつといいか」

「はい」

上がり込み、畳に座る。狭いので部下は玄関に待機させた。

「今日の昼ここに来たとき、ここにこれが置いてあった」

ポケットからチラシを取り出し息子に渡す。

「……そっか」

「意味、わかんのか」

「……なんで今日来ました？」

「ん？」

「なんで今日、ここに来ました？」

「一昨日、今日返すと指定されたからだ」

「……僕、修学旅行だったんです。自分で貯めたお金で。あの、ごめんなさい、こんなときなのに」

「最後の思い出だろう」

息子には息子の人生がある。

「……今日、終わって帰ってきたんです。で、そのままバイトに行って」

もうそれ以上言わなくていい、と思った。言わないでくれ。自分を傷付けないでくれ。自分で傷付けるより、人に傷付けられた方がいい。相手を怨めるから。逃げ場ができるから。

「お前の親は俺たちにお前を売った。お前、親の借金背負えるか」

息子が口を開く前に言い切った。

「捨てられたんだ。お前を、俺たちに売った」

二度言ったのはわざとだった。自分でそう考えたんじゃない、言われたのだと息子の心に植え付けるために。

「ついて来い」

息子は大人しくついてきた。玄関の鍵も掛けず車に乗り込む。車内でも一言も話さなかった。これからどうなるのか、とか、親はどこか、とか気になることは沢山あるはずなのに。

「戻りました」

「ご苦労」

「若頭……」

繁華街の中、ビルの上階。事務所に戻ると電話で息子を連れてこいと指示をした若頭がソファに座って待っていた。

「……早川の息子か」

「はい」

「お前は下がっていい」

「……はい」

気になった。けれど命令は絶対だ。部屋を出る際に息子の顔を見たけれど、息子は下を向いたままこちらを見ることはなかった。

※ ※ ※

いつかこうなるだろうな、と思っていた。親はろくでなし。ギャンブル狂いで親族にも縁を切られていて頼るところもなかった。

「名前は何？」

「早川 優輝 《はやかわ ゆうき》です」

「優輝。お前、親の借金、どうする？」

やるしかない。それに返し終えたらもう取り立てに怯える必要もなくなる。自由になれる。でも、これからどうなるのだろうと思うとすぐには領けなかった。

「親からの、最後のプレゼントだよ。きれいな顔に生んでもらって、ここまで育ててもらった恩を返せるときだよ。親孝行」

若頭と呼ばれた男の言葉が胸に刺さる。最後のプレゼント。最後の、贈り物――。

これが最後の親との繋がりだった。これを断ち切ったら、親に完全に捨てられてしまう――捨てられて――捨て――。

「……返します」

涙が落ちた。

「ここがお前の部屋だ」

「はい」

「生活に必要なものは全て揃っている」

ここに連れてきたのはアパートで会話をした男だった。以前にも会話をしたことがある。優しいヤクザもいるんだな、と思った記憶があった。

「名前」

「ん？」

「名前、何て言うんですか」

「俺か？ 伊藤だよ」

「伊藤さん、ありがとう」

「……お前……」

伊藤の眉根が寄った。やはり優しい人なのだ。

「……ここ、僕が住んでた部屋よりいい部屋だね」

「……そうだな。隙間風も雨漏りもない」

「うん、ありがとう」

伊藤を見送り、そのまま玄関に座った。

明日から始まる仕事の内容は若頭と呼ばれた男から聞いていた。男に、身体を好きにさせる仕事。こちらから何かをする必要はほとんどない。ただ痛めつけられていればいい。それで射精できれば尚いいが、できなくても痛みに耐えられればそれでいい。

店までは送迎があるから、時間になる前に腸内を洗浄してシャワーを浴びて待ってればいい。仕事道具は全て店に揃っている。

「借金を返し終えたらお前は自由だ」

そう言われた。それだけが救いだった。

「……父さん、母さん」

お金を返し終えたら、迎えに来てくれるだろうか――。

※ ※ ※

「あああああああ！！」

痛い。ペニスが焼ける。

「あああああああ！！！！」

客がペニスにタバコの火を近付けている。痛い。逃げたい。なのに四肢を拘束されているせいで逃げられない。むしろ動けば火がペニスに触れてしまう。

「逃げなくていいの？」

とても優しく顔をしているのにひどいサディストだ。優しい顔、優しい声で逃げろという。逃げられなくしているのは自分なのに。それなのに、痛みで思考の止まった身体に逃げろと言う。逃げられると思わせようとする。

「ぐあああああ！！！！」

あまりにも逃げることを示唆されるので、もしかしたら本当に逃げられるのではと思ってしまった。その瞬間、亀頭に激痛が走った。

「あああああああああああ！！」

最初に強引に勃起させられたペニスは完全に縮こまってしまっている。それなのに男は萎えたことを怒ることもなく、やわやわと揉んでその柔らかさを楽しんでいる。

「可愛いね、おちんぽ痛いね」

「いだいいいい！！！」

「うん、もつと痛くなってみようね」

こんなことをされたら使い物にならなくなってしまふ。ああでも尿道を責められないだけましか。あれは痛かった。排尿する度に激痛で、我慢をしすぎて膀胱炎になりかけたのだ。

「おちんぼ、寒くて萎えてるのかもしれないな。温めてあげる」

「つひ、やつ、ああああああああああ！！！」

再び近付けられるタバコ。男からタバコの匂いはしなかったからきつと非喫煙者なのだ。なのにこの遊びのためだけにタバコを買っている。

「ああ、暴れるから火が当たっちゃったよ。でも少し温まったかな」

「うううう……」

涙が止まらない。痛い。肉の焼ける臭いがする。人間の焼ける臭い。吐きそうになるほどの悪臭だ。なのに男はすんすんとあからさまに臭いを嗅ぐ。

「……ああ、いい匂いがしてきた。美味しそうな匂いだ」

「や、やめつ、やつ、や、やあああああ！！！」

男が火傷で痛むベニスを口に含んだ。痛い。滲みる。火傷でぐちゅぐちゅになったそこを舌でえぐられる。

「あああああああ！！！」

あまりの痛みにベニスが濡れた。漏れてしまった。男の顔が離れる。

「あ……」

どうしよう。怒られる。殴られるかもしれない。身体を庇いたい。けれど拘束されているせいで動かない。

「ああ、お漏らしするほど痛かったのか」

幸い失禁したことすら男には悦びだったらしい。しよろしよと尿を吐き出し続けるペニスを抓んでいる。

「痛い……痛い……」

尿も滲みる。痛い。でも止められなかった。それにこのあと一体何をされるのかと思うと恐怖に身体が竦んでしまふ。もう痛いのは嫌だった。

「その怯えた表情、とても可愛いよ。けどそろそろ痛みで感じるようになってほしいな」

そんなの無理だ。こんなに痛いのを感じるなんて。

「……まあ……あ」

男が壁に目をやった。その途端、部屋に「ピピピ」と電子音が鳴り響く。終了の時間だった。

「……じゃあ続きはまた今度しようね」

男が拘束具を外していく。ここで仕事を始めた当初こそ、縛られたらそのまま際限なく痛めつけられ続けるんじゃないかと思っていたのだけれど、ここに来る客は皆理性があるのか時間になると必ず拘束具を外してくれた。

いや、もしかしたら外す理由はこれかもしれない。

自由になった身体を動かしベッドから降りる。ここに来て早一週間。連日痛みに耐え続けた身体はひ

どい筋肉痛だった。けれど必死に手を床につける。そして額を床につけるのだ——親が伊藤たちにしていたように。

「今日も……ありがとうございます」

これほど痛めつけられ、身体はボロボロにされ、それでも礼を言う。仕事だからだ。けれど男はこの挨拶に満足して帰っていく。

男をドアまで見送り部屋を見回す。

広い部屋だ。客によって求めるプレイが違うので、なるべく全てに対応できるようにできている。

広さは三十畳ほどあるだろうか。こんな広い部屋は見たことがないからよく分からないけれど。大きなベッドと、ソファがある。それから大きな鏡も。拘束用の什器もいくつかあるし、足を大きく広げる診察台もある。壁に付けられた棚には蠟燭や鞭、ディルドにバイブ等小物がずらりと並ぶ。サイズや色も複数あるので総数は百くらいありそうだ。

部屋の奥にはガラス張りの浴室とトイレ。どちらも丸見え。浴室ではマットプレイもできるし、当然トイレも広い。

どこでも、何でもできる。そういう部屋だ。

シャワーを浴びようと思ったとき、部屋の電話が鳴った。痛む身体に鞭を打ち受話器を上げる。

「はい」

『このままもう一本だ』

「……まだ片付けが」

『そのままでもいい』

「え」

基本的に、一日につく客は一人だ。ここに来る客はハードなプレイを好む。怪我が残るようなプレイばかりなので、どうしても一人しか対応できないのだ。それは血が流れるペニスを見れば誰だって「前の客」を意識してしまうから。男娼の身体を考慮しての規定ではない。

なのにどうしても一人なのだろう。それも片付けもしなくていいなんて。

しかし何を言っても無駄だ。受話器を戻し、出入り口の前の床に座って待つ。足音が聞こえ始めたところで額を床につけた。

ガチャ、と音がする。まだ顔を上げてはいけない。

「ユウくん？」

「はい。宜しくお願い致します」

低い声だ。落ち着いている。優しそう。けれどここに来ると言うことは痛めつけることが趣味なのだ。普段周りに優しくしている分、内面にはハードなものを抱えている客が多い。気は抜けない。といってもされるがままになるしかないのだけれど。

「顔を上げて」

ゆつくりと上を向く。高級そうなピカピカの革靴。折り目の入ったスーツ。足が長い。ああ、スリーピースだ。背が高い。肩幅が広い——イケメン。

「噂通りの可愛い顔だね」

「え……」



「泣いたのかな」

男が近付いてきた。そして目の前に膝をつく。

「……まずはベッドを片付けようか」

この男は一体何なのだろう。優輝の頭を撫でると、それから靴を脱いで部屋に上がった。そしてベッドに近寄りばさりと汚れたシーツを剥ぎ取る。

「……ここで排尿を？」

「……痛くて、お漏らししてしまいました……」

「そうか」

それ以上男は何も言わない。防水シートまで全て剥がすと辺りを見回し、替えのある場所を尋ねてくる。

立ち上がり、シーツの替えを取り出すと横から優しく奪われた。

「ありがとう。座っていてね」

客に逆らうことは許されない。その場で床に座ると男は何か言いたげな顔をしたけれどそのままベッドメイクを始めた。

慣れた手つきだった。同業者なのだろうか。でもそれにしてはやけに身に纏う物に高級感があった。今まで優輝の生活で高級なものを見る機会は皆無だった。しかしここに来る客は皆、優輝でも聞いたことのあるブランド品を身に着けていたのだ。それを見ているうちになんとなく分かるようになっていた。

「ユウくん」

「はい」

男はベッドに座っている。そこに近付く。

「前の客の後、シャワーは浴びたかな」

「いえ、まだです」

怒るだろうか。話が違うと言われたらどうしよう。

けれど男は優しく微笑んだ。

「そうか。じゃあ、綺麗にしに行こうか」

この男は一体何がしたいのだろう。でも今のところ怖い思いはしていない。

「おいで」

差し出された手におずおずと手を重ねる。それだけで「いいこ」と褒められた。この男の真意が分からないことが逆に怖かった。

しかし男は風呂でも優しかった。自分が服を脱ぐ間「少し待っててね」と言っただけ、全裸になってもこのまま掛けられたら確実に痛いな、と思っているとその思いに気付いたのかシャワーを止めた。

そして立てかけられたエアマットを指す。

「これ、今日使った？」

「いえ、使ってません」

男は満足そうに頷くとそれを床に敷いた。

「寝転んで」

「はい」

怖い。水責めは苦しいし怖い。死への恐怖を味わう。過去、ろくでもない思いしかしてこなかったけれどそれでも死にたいと思ったことは一度もない。だから水責めは本当に怖い。

「……大丈夫。力を抜いて」

もしかして首を絞められるのだろうか。まだここに来て一週間だというのに、客の中には死姦趣味の男もいた。それでも現実にはそれをすることはできないので、上手く頸動脈を締めて失神させてするのだと言っていた。そこまでは覚えていてくれるけれど、気が付いたらプレイは終わっていた。最初は何が何だか分からなくて怖かったけれど、終わった後男は優しくかつたし、締められるときには暴れるより身体力を抜いて身を任せてしまった方が楽だということも学んだ。

それと同じだろう、と身体から力を抜く。

「いいこ」

男が身体に触れた。何かを確かめているようだった。首を絞められるわけではないらしい。ばれないようにほっと息を吐く。

「……今日はどんなことをされたのかな」

「……ペニスをタバコで炙……」

炙られた、と言うべきか、炙ってもらった、と言うべきか。やった本人の前なら「してもらった」と表現するけれど、この場合したのは他の客なのだ。

「……おちんちん、炙られたの？」

男の方から言ってもらい、助かったと思いながら頷く。

「そう……痛かったね。火傷してる」

「はい」

「他には？」

「それだけです」

「何時間したのかな」

恐怖と痛みで時間の感覚はなかった。けれど確か男が入室したのは十時。

「すみません、今何時ですか」

「……十五時だよ」

客は時間を指定してプレイに来ているはずだ。けれど優輝には何時まで、ということとは伝えられなかった。部屋で終了の電子音が鳴るのは管理者が事務所からそう設定しているから。だから優輝は「いつまで続くか分からない責め」に耐え続けることになる。それと終了時間を気にしながらプレイすると気がそぞろになるから、と言う理由からだ。どうせ男娼はされるがままになるわけで、普通の風俗のように時間内に客を満足させなければならぬわけではないので問題は生じない。

「五時間くらです」

「……五時間もおちんちんを炙られたのかな」

「いえ、ずっと炙られていたんじゃないかと、炙られるふりで怖がるところを楽しめました」

「そうか」

男が目を細めた。

「それはとても怖かったし痛かったね。他に痛いところはあるかな」

正直に言ってもいいのだろうか。男を見る。優しい目だった。人を痛めつけて遊ぶような目には見えなかった。

「拘束されていた手首と足首が……あと全身が筋肉痛です」

「筋肉痛？」

男が上腕を撫でた。

「痛みに耐えるのに力が入ってしまったて」

「ああ……そうか、そうだよね。おちんちん焼かれたら痛いもんね」

男がそつとペニスに触れた。

「っ！」

「ああ、ごめんね、痛かったね。でもおしっこ匂いもしているし、痒いでしょう。綺麗にしようね」  
そのまま楽にされていて、と男は言った。言われたようにしていると手の指先からゆつくりとシャワーで流されていく。

「お風呂、今日使った？」

前の客が来る前に準備として溜めたままになっている。きつともう温いだろう。

「いえ……」

男の手はとても心地よかった。身体の芯から力が抜けていく。

「そう。じゃあ少し身体を温めた方がいいかな……でもおちんちんが滲みるか」

それは独り言のようだったので何も言わなかった。目を閉じて優しい手に集中する。

「いいこ……眠ってしまったてもかまわないよ」

くくく

昨日の続きだよ、と一本目の客は言った。そして無理矢理ペニスを勃起させ、上を向いた亀頭を灰皿にしたのだ。

「ああああああああああ！！」

「いい声で啼く灰皿だ」

男は満足げにタバコを吸い、咳き込んだ。

「やっぱりタバコなんて吸う物じゃないなあ」

そう言つてタバコを持ったまま水を飲み、ジクジクと痛むペニスに耐える優輝の顔を眺めた。

そして灰が長くなつた頃、萎えたペニスを持って上を向け、灰を落とした。尿道口に灰が乗る。

「ぎゃああああああああああ！！」

灰も熱かった。それに昨日の火傷はもちろん一晩で治るわけもなく、持たれた部分も痛かったのだ。  
とにかくペニス全てが痛かった。

「うん……いい感じ。でも痛そうだね」

「痛い、痛いですっ」

勝手に涙が零れて落ち、こめかみを濡らす。

「痛いのか？」

「……嫌です……」

「うん、誰でも痛いのは嫌だよ」

そうやって男は優輝の手の拘束を解いた。終わりのだろうか、と思いたい気持ちを押し殺す。希望を持てば絶望はその分大きくなるから。

「はい、自分でおちんちん抜いて大きくさせて」

「え……」

「ほら、早く。じゃないとまた灰を落とすよ」

「やつ」

急いでペニスを抜いた。痛みが強すぎて快感はないけれど、触れたことで充血していく。

「じゃあそのまま抜いていて。また可愛いおちんちんの口に灰を落とすから。痛いのが嫌ならたくさん抜いて、我慢汁で尿道口を濡らせばいいんだよ」

まるで希望を持たせるような言葉だったけれど、そんなの逃げ場にはならなかった。だって火傷で痛むペニスをいくら抜いたところで、そしてこれからまた灰を落とされると分かっている興奮でさるわけがないのだ。

それでも言われた通りにしなければ、と必死に痛むペニスを抜いた。やはり少しも気持ち良くないし、むしろ痛みは増すばかりでぎりぎり勃起を保つことしかできない。

そして灰が落とされた。

「あああああああああああ！！」

「だからおちんちん自分で濡らしたらよかったのに」

まだタバコは四分の一しか燃えていない。男はタバコを吸わず自然に燃えるのを待つだけなので時間が長いのだ。せめて少しでも濡らそうと努力するけれど、やはりどうやって濡れなかった。

ふっと尿道口に息を吹きかけられ、冷めた灰が宙に舞う。そしてまた顔を見せた尿道口に何度も何度も灰が落とされた。

終了を告げる電子音が鳴ったとき、尿道口はぐちゃぐちゃだった。とてもじゃないが射精も排尿もできる形をしていなかった。

「治った頃にまた来るね」

男はそう言って帰って行った――。

「……そうか。とても痛かったね」

男が悲しそうな顔でペニスを見た。触れないのは痛むと分かっているからだろう。そつとシャワーの水を出し、ペニスに掛けてくれる。

「……最後におしっこをしたのはいつ？」

「朝です……」

朝、出勤前。出勤してすぐにタバコ男が来たのだ。

「……じゃあおしっこ、溜まってるよね」

「はい……」

でも出せない。どうやったって出せない。

「膀胱炎になっちゃうよ」

「……はい」

分かっている。それに苦しい。けれど無理だ。こんなぶよぶよに焼き潰れた尿道口から排尿するなんて。

「……まずはおちんちんを冷やして、その間に鎮痛剤を飲もう。氷水を用意するから、それに先っぽを入れたままおしっこしてみよう」

「やつ！……あ、ごめつ、ごめんなさいっ」

客の言葉に嫌だと言ってしまった。ここに来た初日にされた、顔も忘れた客にされたお仕置きの恐怖が甦る。でもこの男はお仕置きをするなんて言わなかった。

「大丈夫。嫌なら嫌と言っていいいんだ。けれど俺が帰った後、自分でおしっこできるかな」

「……できないです……」

この男を喜ばせるつもりはなかった。ただ素直に答えただけだ。

「じゃあ、一緒にいるから。頑張ろうね」

「はい……」

シャワーを持っているように言われ、男が浴室を出た後も自分でペニスに冷水をかけ続けた。水が掛かっている間だけは痛みがマシになる。けれど楽なのは今だけだ。水を止めればまた激痛が走る。

「お待たせ」

男はすぐに戻ってきた。片手に氷が入ったグラス、もう片方には薬とペットボトルを持っていた。

「先に飲もうね」

そう言って水と薬を渡される。また未開封の箱だった。昨日もそうだったのに。きつと不審なものではないという安心感を与えようとしてくれているのだろう。

とにかく早く効くというのがウリの錠剤を飲み込み、男に礼を言う。男はまた優しく微笑むと今度は洗面器に水を張り、グラスに入れていた氷を入れた。

「これにおちんちんを入れて」

起き上がらせてもらい、四つん這いになってペニスを丸ごと洗面器に浸した。

「まだ昨日のも痛いね」

「はい……」

でも氷水はとても気持ちよかった。冷たさに縮んだそれは人に見られたくないほど小さくなっていただけど気にしている余裕はない。それにこの男はそんなことで人を馬鹿にするような人間には見えなかった。

男は正面に来ると頭を抱き込むようにして抱きしめてくれた。温もりが嬉しい。微かにフレグランスの香りがした。

「おしっこ、出してみようか」

「……怖い……」

くくく

「優輝くん、紹介するよ。これから優輝くんに痛いことをしてくれる近藤だ」

普通はご主人様という立場なのだが、優輝の主人にさせるわけではない。優輝も店で客の名前を知らないままプレイしていたのだから、呼び名なんてどうでもいいだろう。

「はじめまして……」

「……はじめまして……」

優輝は酷く怯えていた。まだこの部屋に来て二日。環境にも慣れないし、怪我也まだ治っていない。

「今日は顔合わせだけだよ。それからNGプレイの打ち合わせ」

「……はい……」

「優輝くん、よろしくね」

「宜しく願います……」

変な話、趣味で来る客よりもこういうプロの方が安心なのだ。加減が上手い。けれどそれは言わない。恐怖を覚えれば覚える程、解放されたときに縫う気持ちが強くなる。

「さあ、優輝くん、服を脱ごうね」

身体を固めたままの優輝の服に手を掛ける。嫌がる素振りはないので、そのまま全てを脱がせた。

「ベッドに行こうか」

二人の寝る寝室に部外者を入れるつもりはない。ここに来たときには空き部屋だった部屋に昨日入れたベッド。もちろんそこは防音室だ。

「さあ、優輝くん、見てもらおうね」

優輝を後ろから抱えるようにして足を開かせる。「や」と小さな声が聞こえた。

「……すこいすね」

近藤が陰部を覗き込みながら言った。

「潰れた尿道口がいやらしいだろう」

灰皿にされたという尿道口は結局歪な形を残したままだった。病院に行けばまだ綺麗になったのかもしれないが、優輝は病院に行くことはできなかった。皮膚は突っ張り、尿道口は隙間を残す程度になっている。

「や……日向さん……」

恥ずかしがる様子も可愛い。いつかこれで勃起できるようになればいいと思うのだけれど、まだ時間がかかるだろう。今のところまだ何一つ調教はできていないのだから。

「大丈夫だよ。まだ見てもらうだけだから怖くないよ」

諭すように言って頬にキスをする。それだけで「ん」と声を出してしまうところが愛らしい。

「虐めるのは基本的にペニスと陰囊だ」

「はい」

手当て興奮するのはやはり急所だ。手や足を怪我したって、心配するだけで興奮はしない。

「乳首はどうですか」

「乳首か……」

今まで優輝は乳首を虐めるのが好きな客には当たっていなかったように思う。

「優輝くん、乳首を虐められたことはあるかな」

「ないです……」

「乳首をオナニーで弄ったことは？」

「っ、ないですっ」

素直に赤く染まる顔。涙が浮かぶ目も愛おしい。

「オナニーするときはいつもどこをしてみたのかな」

近藤がいるが、無視して羞恥で虐めていく。

「……おちんちん……」

「だけ？」

「だけですっ、だって、そんなの僕全然知らなくて……」

そう言えば携帯も持ったことがないと言っていた。お金がなかったからネットから情報を得ることもできず、DVDや雑誌を手に入れることもできなかったのだろう。それにそもそも、親子揃ってワnlム暮らしでは気軽に抜くこともできなかったかもしれない。

「なら、少し覚えてからがいいかな」

「え……何を……？」

「乳首で気持ち良くなれるようになってから虐めてもらおうか」

「っ……」

優輝が身じろぐ。

「それとおちんちんと陰囊だけがいい？」

アナルを弄らせるつもりはない。勃起させるためにパイプやデイルドを入れることは許すが、傷を付けるのはダメだ。挿入ができなくなる。自分が痛みを与えることになるのは避けたい。

「優輝くん、いいこだからお返事してごらん」

「……日向さんが……」

「うん？」

「日向さんが、手当てしたいって思うところ……」

なんていい子なのだろう。なんて、なんて――。

自分の異常さは理解していた。だからこそ自制し、恋愛はしてこなかった。

「うん……うん、優輝くん、ありがとう」

それならやはりペニスと陰囊だ。

「ペニスと陰囊を頼む。他の部位が必要になったときはその都度伝える」

「わかりました」

「っ」

近藤の声に優輝の身体が震えた。

「優輝くん、大丈夫。怖くないよ」

頬に頬を擦り寄せ、抱えている腹を撫でる。この腹ももう少し柔らかくなった方がいい。しばらくは栄養面に気を配らねば。

「さあ、じゃあ今度は陰囊を見てもらおう。おちんちん、痛いけれど少しどかせるかな」

傷がひどく、ついさつきまで薬が塗られ、包帯が巻かれていたペニスだ。今は近藤に見せるために解いているだけ。だからまだ触れると痛いだろう。

「や……日向さんがして……」

小さな声だったけれど、その可愛いおねだりはしっかりと聞こえた。頷いてそっとペニスに触れる。

「っ！！」

「ああ、痛いな……ほら、もう大丈夫。このまま持っているだけだよ」

ペニスを持ち上げ陰囊を曝す。

「近藤、どうなっている？」

「腫れていますね……鞭でしょう」

「そうだ」

二日前、優輝は客に鞭打ちを受けた。ペニスと陰囊。目当てはペニスだったようだけれど、当然近くにある陰囊にも鞭は当たっていた。

「裂けてますね」

「ああ」

その手当は最高だった。皮膚が、陰囊が裂けるまで鞭を受けるなんてこと、普通の人なら決してありえない。しかし優輝は耐えた。そしてそこをケアしたとき、優輝は痛みに泣き叫んだ。手当は鎮痛剤が効いている時間だったのに、だ。痛い痛い泣き、助けてと求めた相手は日向だった。それにひどく興奮した。今すぐアナルに昂りを突き立てたいと思った。

けれどまだだと自制したのだ。もつといいタイミングで。勢いなんかではなく、優輝が自分の物だと優輝に自覚させる最高のタイミングで抱きたかった。

「痛かったでしょう」

「ああ……とても泣いたな」

「はい……痛かったです……」

「最初に見つけたときは気を失っていたんだよ」

「日向さん……」

怖かったね、と守るように抱きしめてやると優輝は上体を捻り抱きついてきた。可愛い。それに少し疲れたようにも見えた。まだあの店から解放されて時間は経っていない。解放感も実感できていないだろうし、恐怖心だって消えていない。

近藤に会わせるのは少し早すぎたのだろうかと思うものの、心が回復してから突き落とすようなことはしたくなかった。

近藤の存在を含めたまま回復してもらいたかった。

くくく

尿道口がほとんど塞がっているせいで勢いよく飛び出すことのできない精液。それらはただらと萎えつつあるペニスを伝って陰囊に流れていった。



「射精後のお世話もしてあげようね」

「え……？」

「敏感なところなんだから。たくさん擦ったら痛くなってしまうかもしれないでしょう。それに精液も綺麗にしてあげないと痒くなってしまうよ」

そう言って日向はベッドボードからガーゼを取り出した。部屋から出て、それを濡らして戻ってくる。手にはペットボトルもあった。日向の事務所で初めて飲んだ、フルーツジュースだった。美味しくて、たくさん飲ませてもらったやつ。

「寝室に水道を引こうかな」

そう言いながら萎えきったペニスを持ち、優しく拭いてくれる。

「たくさん出せたね。おちんちん、久しぶりだったから気持ち良かったね」

「はい……」

恥ずかしい。自慰を見られ、その後処理までもらうなんて。でも嬉しい。

「さあ、綺麗になったよ。飲み物を飲む？」

「あ、自分で……」

起き上がろうとすると、先に日向が動いた。ペットボトルのキャップを開けて、さらに背中を支えて起き上がらせてくれる。射精で疲れているだけなのに病人になったみたい。

冷えたジュースが喉を潤す。三分の一ほど一気に飲んでほっと息を吐いた。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

日向は急いたりしなかった。でも近藤が待っている、と優輝の頭にはそれがあった。

「……近藤さん、お待たせしちゃった」

「いいんだよ、大丈夫。もし疲れているなら今日はなしにしてもいいよ」

「えっ」

「だって、俺は優輝くんを痛めつけるのが目的じゃないから。その後の手当がしたいんだ。けれどそれだって興奮のためだよ。優輝くんが常に怪我をしていないといけないというわけじゃないんだ」

「あ……」

そうか。店ではずっと怪我をしていたし、毎日来てくれていたから上書きされるような傷を欲しているのだとばかり思っていた。ここに来て新たな怪我をさせないのはこの部屋の環境に優輝が慣れるのを待って、我慢してくれているだけなのだとばかり。

でも、日向は傷の手当をしないとイけないと言っていた。自分だけ気持ち良くなって、その後の処理までしてもらっておきながら、というのは気が引けた。

それに自分自身、日向の毎日の手当がなくなるのは寂しかった。

「……近藤さん、呼んで……」

「本当にいいの？」

「うん……僕、頑張るから、だから終わったらいっぱい撫でて」

「うん……」

日向は泣きそうな顔を見せた。顔が綺麗だからそんな表情もさまになってしまう。

「……優輝くんが頑張ってくれている間、俺はずっとドアの前にいるから」

「え……」

その間も一緒にいてくれるものだと思っていた。

「ごめんね、でもドアの前で頑張れて思ってるから」

「……わかりました」

それもきつと趣味なのだろう。それに痛み付けるのは苦手だと言っていたから、その瞬間を見るのは苦手なのだ。

「でも、終わったらすぐに行くから。そしたらどんなことをされたのか、教えてね」

「はい」

そうだった。日向は店でも手当の前にどこをどんな風にされたのかの詳細を言わせた。

怖い。少しずつ店での記憶が甦ってくる。

ハピエンです。

約5万8千文字。

宜しく願います！